

## 創造都市論と R・フロリダの「転向」

写真はリチャード・フロリダ『クリエイティブ資本論』2008年である。2002年刊行“*The Rise of the Creative Class*”の邦訳である。創造階級論／創造階級論の代表的な文献として、多くの人に読まれた。序文をすこし紹介する。



本書は新しい社会階層の台頭について述べたものである。科学者、技術者、建築家、デザイナー、作家、芸術家、音楽家、あるいはビジネス・教育・医療・法律などに関わる職務に就き、その中心的な部分においてクリエイティビティを発揮することが求められている者が、その階層の構成員である。これらアメリカの労働人口の30%以上を占める3800万人の社会階層

「クリエイティブ・クラス」は、人々の働き方から価値観や欲望、日常生活そのものに対して重大な影響をおよぼしており、今後もそれは続くであろう。

私の結論は、地域発展は企業によってというよりも、寛容性が高く、多様性に富み、クリエイティビティに対して開かれた地域で起きているというものである。なぜなら、あらゆる種類のクリエイティブな人が、このような地域に住みたいと思っているからである。

写真下は昨年10月刊行の矢作弘さんの『都市危機のアメリカ』。示唆に富んだ指摘が多いが、なかでも創造階級論／創造都市論を提唱したR.フロリダの「転向」に注目した。



2017年春、フロリダは新著『新しい都市危機』を出版し、創造階級論の欠陥を列挙し、自説を大胆に修正した。副題は「我々の都市は不平等を拡大し、社会の分断を深刻にし、中間層を解体する」である。ここで「我々の都市」は、創造都市である。その議論の核心は、21世紀を迎え、アメリカの都市構造は「独り勝ちの都市化」を露呈するようになった、というところにある。そして創造都市には、潜在的、本質的に社会格差を拡大し、「新しい都市危機」を育む側面があるという。副題では、「(この危機に対し)我々は何ができるのか」を問いかけ、都市研究の方向を転換する必要性を訴えている。

矢作さんは注で次のように指摘している。フロリダの創造階級論に奉じて踊った日本の創造階級論／創造都市論者がフロリダの転向について言及した論文を書いた、ということ寡聞にして知らない。フロリダの転向を知らないのか(無知)、知っただけで触れないのか(無視)、いずれにしても創造都市研究者の責任が果たされていない。

今度の京都研究会では、この点についても報告して議論したいと考えている。

(2021年3月14日)